

言語文化研究所 入選作品1席

『〈時名詞〉+中（チュウ）』と

『〈時名詞〉+中（ジュウ）』の使い分け

—日本人は〈トキ〉をどのように捉えて言語化しているか—

言語教育研究科日本語教育学専攻・博士前期課程 2年 小柳 昇

目 次

- 1 はじめに
- 2 先行研究と問題提起
- 3 新濁を契機とした「～中」の意味の分化と拡張
- 4 日本人の時間の捉え方
- 5 「〈時名詞〉 + 中」の読み方とその使い分け
 - 5.1 「〈場所名詞〉 + 中 (ヂュウ)」から〈時名詞〉への拡張
 - 5.2 「一～中 (ジュウ)」と発話時を基準にした〈時名詞〉のつながり
 - 5.3 「ジュウ」の読み方の〈時名詞〉全体における分布
 - 5.4 「午前中 (チュウ)」と「午後中 (ジュウ)」について
- 6 まとめと今後の課題

1 はじめに

現代語において漢語系接尾辞の「中」が接続した熟語はかなりの数がある。「世界中」のように、場所（地名、国名などの固有名詞を含む）を表す名詞に「中」が付き、「その範囲の全体にわたって」という意味を表す場合は例外なく「ジュウ」と読まれ、「食事中」のように、動作や作用などを表す名詞に「中」が付き、「その動作、作用の最中」というアスペクトを表す場合には例外なく「チュウ」と読まれる。これらとは対照的に、「午前」「きょう」「来週」「今月」「夏」「2008年」「一日」など、ある一定の幅をもった時の概念を表す名詞（以下、〈時名詞〉と呼ぶ）に「中」が付いた場合にはその読み方が一定ではなく、ある熟語はいつも「中」が「チュウ」と読まれ、ある熟語はいつも「ジュウ」と読まれる一方で、両方の読み方をもつ熟語も存在する。この二つの読み方と使い分けについては、個人差があることは確かだが、まったく理由がないわけではないことも確かである。どんな場合に「ジュウ」と読まれるのかを明らかにするのが本稿の目的である。

本稿では、場所名詞がつく「日本中」の「ジュウ」と「一日中」の「ジュウ」そして「きょう中」の「ジュウ」を意味の拡張という点で連続したものであると考え、時間の「存在メタファー」¹という認知言語的な視点から「チュウ」と「ジュウ」の使い分けを分析する。

2 先行研究と問題提起

漢語系接尾辞の「中」の読み方と意味について論じたものには、ウィンター（1973）、水野（1984）、丹保（2001、2002）などがある。ウィンター（1973）は、読み方と述部の意味とのつながりに注目し、「範囲内（において）」と「範囲内全体（にわたって）」という意味が、それぞれ「チュウ」と「ジュウ」の読みと関連していることを指摘している。一方、水野（1984）では（1a, b）と（2a, b）の各ペアの対比から、「範囲内」の意味でも「範囲内全体」の意味でも読みは同じなので、音声形式による意味の対立は認められないと述べている（同書：95）²。

- (1) a 今年中（ジュウ）に完成させる。[範囲内]
- b 今年中（ジュウ）は忙しい。[範囲内全体]
- (2) a 午前中（チュウ）に来てください。[範囲内]

b 午前中（チュウ）は、ずっと忙しくて行けない。[範囲内全体]

この二語は一方の読み方に固定されているため、一つの読み方で両方の意味を表現しているわけだが、これのみで「ジュウ」の読み方と「範囲内全体」とのつながりがないと言い切ることはできない。水野（1984：95）自身が指摘しているように、「一日中」「一年中」ではそのつながりが認められるし、両方の読み方をもつ「今週中に」「今月中に」などに意味の違いを感じる母語話者もいる（丹保2001：51）。

また、水野（1984）はアンケート調査の結果から「～中」の読み方のゆれを指摘している。「今年中」「一年中」は「ジュウ」、「三十九年中」は「チュウ」にほぼ固定されるのに対して、「来年中」「1965年中」「本年中」「三日中」は読み方がゆれていると指摘しているが（同書：94）、その要因には言及していない。さらに、水野（1984）は中国語の「～中」には「範囲内全体」の用法がないことから、「範囲内全体」を表す用法は、「漢字「中」が日本に伝わってきてから、日本語の中で独自に発達した用法である」（同書：99）と指摘している。本稿でもこの仮説を支持し、意味の拡張の流れを考える。

丹保（2001、2002）では、和語と漢語（※丹保2002では「字訓語」と「字音語」と呼んでいる）の違いが読み方とどのような関わりを持っているのかについても考察されているが、音に注目するだけでなく、（重なる部分も多いが、）日常語かどうかという視点も重要だと考える。以上の点を踏まえて、本稿では次の①～⑤の課題を設定し、次節以降で順番に論じていく。

(3) ①「チュウ」と「ジュウ」のどちらを基本と考えるべきか。

②「ジュウ」と意味の関係について：

(i)「範囲内全体」との繋がりがどのようにして生まれたのか。

(ii)「今日中」は「ジュウ」としか読まれなくてもかわらず、「範囲内全体」の意味では使えず、「今日中に」で「範囲内」の意味で使われるのはなぜか。

③「ジュウ」の読み方が使われる熟語のばらつきについて：

(i)ばらつきは、発話時を基準点とする〈時名詞〉とそうではない〈時名詞〉の違いに関係があるか。あるとしたら何か。

(ii)発話時を基準点とする「きょう」「あす」「今週」「今月」「今年」のうち、「きょう中に」「あす中に」「今年中に」は「ジュウ」と読まれるのに、「今週中に」「今月中に」は「チュウ」と「ジュウ」の両方の読み方があるのはなぜか。

④和語と漢語では「～中」の読み方がどのように違うか。

⑤「午前」と「午後」について：

(i)「午前中」は一方の読み方(チュウ)しか持たないにもかかわらず「範囲内」と「範囲内全体」の意味をもつのはなぜか。

なぜ「午前中(ジュウ)」はないのか。

(ii)「午前中」とペアをなす「午後」は逆に「午後(ジュウ)³」という読み方しかないのはなぜか。

丹保(2002)では、丹保(2001)の考察では十分に説明されていなかった〈時名詞〉⁴の語彙的特徴と読み方との繋がりを論じている。「午前ちゅう」「午後じゅう」「夏(秋、冬、春)じゅう」を取り上げ、用例を丁寧に分析した上で、時の名詞の「ひとまとまり性」あるいは「範囲の明確さ」が読み方の使い分けに影響を与えていると指摘している⁵。本稿においても、この「まとまり性」に注目するが、丹保(2002)との違いは、限られた一部の〈時名詞〉を対象とするのではなく、〈時名詞〉全体の枠組みの中で、認知的なアプローチによって、“典型的”に「ジュウ」と読まれるものと“周辺的”な事例として「ジュウ」と読まれるものを示すことにある。

3 新濁を契機とした「～中」の意味の分化と拡張

「現代仮名遣い」(昭和61年内閣告示)では「世界中」「一日中」の「中」の読みは「ジュウ」が本則であるが、歴史的仮名遣いでは「ヂュウ」であった⁶。本稿は正書法の是非には立ち入らないが、通時的にみて、自立語の「中(チュウ)」が接尾語として用いられ、それが新濁⁷を起こしていたことは歴史的な資料から明らかであり、それを出発点として「チュウ」「ジュウ」の使い分けを考えることが必要だと考える⁸。

新濁は複合語の前項末の音が鼻音[n][ŋ][m]の場合に起こるのが原則である⁹。小林(1970)の収集した新濁の語例(約300例)のうち、「中」を後項にもつ語は「場所」「空間」「人・群衆」を表す名詞のみで、〈時名詞〉についての語例は見つからなかった¹⁰。〈時名詞〉にも新濁が起きていたことは推察できるが¹¹、それがどの程度だったかは不明である。そこで、読み方と意味の分化と拡張を図1のように考えてみることにする。

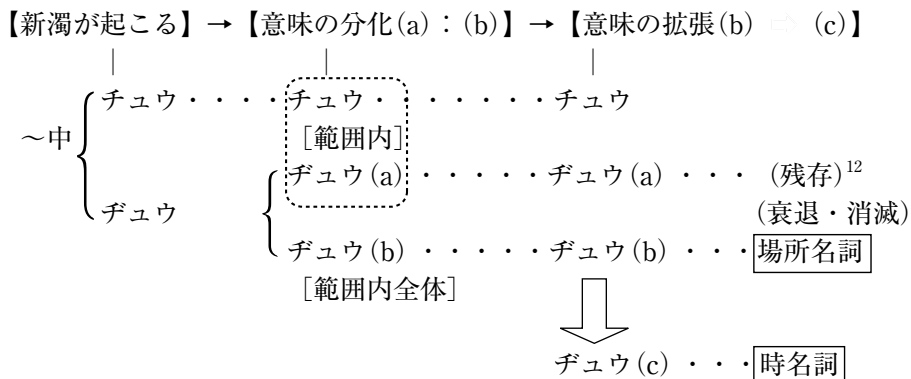


図1 「～中」の意味の分化と拡張

新濁が起こり、「～中」が「チュウ」とも読まれるようになった後、(b)のように「～中」の熟語の一部が「範囲内全体」の意味で用いられるようになった¹³。おそらくこの意味の分化は、抽象的なトキの概念よりも具体的な場所・物の名詞に、より早くかつ多く起こったと推察される。その後、抽象的な〈時名詞〉にも拡張し、「チュウ(c)」が生まれた。しかし、この拡張は存在メタファーによるもので、「明確な境界をもつ」名詞、つまり「まとまり性」が際立っている〈時名詞〉には起きたが、それ以外は起きにくかったか、起きなかったという仮説を立ててみる。したがって、本稿では「〈時名詞〉+中」の読みは、基本が「チュウ」で、一部のある条件を満たす名詞が「ヂュウ(ヂュウ)」という読み方をもつようになったと考える¹⁴。

4 日本人の時間の捉え方

私たちは生活上、どのような時間の長さをひとまとまりの単位と認識しているだろうか。一日が7つで一週間になり、30(または31)で一カ月になり、365で一年になることはだれでも知っているが、これらの長さをもつ時の概念は一様なまとまり性を持っているわけではない。まずこれらの〈時名詞〉を使った表現を『大辞林』で見してみる。そして、「丸1日」「丸1ヶ月」のような「丸1～」と結合する熟語がどの程度使われているかを検索ポータルサイトのgoogle¹⁵を利用して調べてみる。

(4) 大辞林より(“--”は該当する語の欠落を示す)

a 日: 日に日に、日々、日を追うごとに

b 週: -- -- --

c 月： -- 月々、 --
 d 年： -- 年々、 年を追うごとに

(5) 「丸1～」の検索結果¹⁶（検索日：2008.11.03）

	「ウェブ全体」	「青空文庫」 ¹⁷ に限定
a 日：	1,798,000件	22件
b 週：	88,600件	4件
c 月：	115,649件	3件
d 年：	515,000件	28件

(4) (5) から言えることは、「日」と「年」のまとまり性は際立っており、「月」がそれに次いで際立っており、「週」はかなり低いということである。「週」が際立って低いことは、暦の歴史からも説明できるだろう。七曜が日本に伝来したのは9世紀の初めだと考えられているが、当時は占星術とのつながりで暦注として記載されるに過ぎず、一週七日制が広まるのは、明治5年の太陽暦の採用以降である¹⁸。しかもひと月が週ごとに区分された暦が一般に出回り始めるのは大正末から昭和初期にかけての頃だったと見られる¹⁹。

次に、一日の捉え方に目を向けてみる。私たちは現在の定時法のもと、一日の始まりは午前0時だという知識を持っている（図2【一日a】）。しかし、生活の実態（経験）に動機付けられた一日とは必ずしも一致しない。

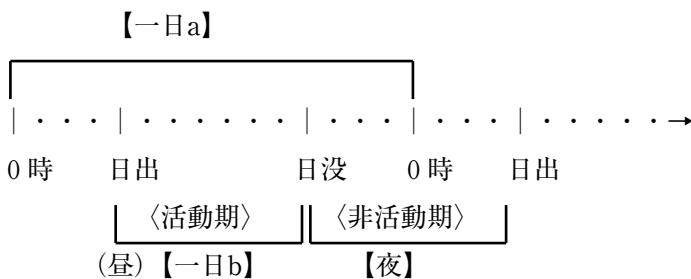


図2 一日の捉え方

昔は人の活動時間にあたる日出から日没までの昼間を人の一日と考えていた（広瀬1993：190、214）。つまり図2【一日b】という捉え方である。この場合、「一日」がまとまり性を持つと同程度に、「夜」もまとまり性を持つと言える。つまり、【一日b】と【夜】は表と裏の関係で、この二つが繰り返すことで時が流れていくと捉えていたの

である。(6) のような【一日b】の使い方は現代の生活でも普通に使われると思われる。

(6) 私は二三冊の書物と、手提ランプを携へて毎朝早く河のほとりへ通ひ詰めて、きまり好く夕暮時に町へ戻つてゐたが、農家の厩屋で馬を眺めるだけで一日を終ることが珍らしくなかつた。

【牧野信一『病状』（「青空文庫」²⁰より）下線は引用者による】

このようにまとまり性の点から言うと、「日」と「夜」が最も高く、「年」がやや低く、「月」がそれに続き、「週」は最も低いということになる。

5 「〈時名詞〉 + 中」の読み方とその使い分け

5.1 「〈場所名詞〉 + 中（ヂュウ）」から〈時名詞〉への拡張

第3節で示したように、本稿ではまず「〈場所名詞〉 + 中」において「ヂュウ」の読みで「範囲内全体」を表すのが広まり、それがメタファーによって〈時名詞〉へ拡張したと考える。それは構造の類似性によるもので、「場所」のように境界のある構造、つまり「まとまり性」が高いものに適用されたとみるのが自然だろう。

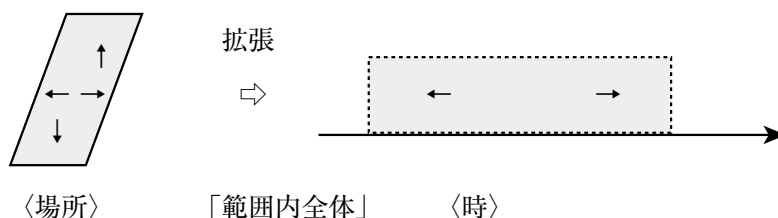


図3 場所名詞から時名詞への拡張

第4節で〈時名詞〉のまとまり性の階層を提案したが、この階層の高いほうに「一」をつけて、「範囲内全体」の意味をもつ「一～中（ジュウ）」という熟語が成立したと考えられる。

(7) 【高】日、夜 > 年 > 月 … > 週 【低】

 | | |
 | 夜中 年中 ※「一」が付かない熟語もある
 一日中 一晩中 一年中

ここで重要なことは、高いまとまり性をもった「日」「夜（晩）」「年」は(7)のような熟語が定着し、慣用表現となったが、まとまり性が低い「月」「週」もまとまりがあると感じる以上、「一か月ジュウ」「一週間ジュウ」という熟語は使われうるということである。googleでウェブ全体を対象に検索した結果が(8)である。ノイズ(関係のない用例)を完全に排除することはできないが、使用頻度の相対的な比較には役に立つ。予想されたように、明らかに頻度が低いが、「月」も「週間」も使われている。

(8) 「一～中」の検索結果²¹ (検索日：2008.11.03)

a 一日中 : 4,367,000件 c 一か月中 : 1,419件²²
 b 一週間で : 4,170件 d 一年中 : 681,000件

5.2 「一～中（ジュウ）」と発話時を基準にした〈時名詞〉のつながり

5.1で示した「一日中」「一年中」は特定の日、年を指さない点で客観的な時の長さを示す名詞である。これとは対照的に主観的な〈時名詞〉、つまり認知主体(話者)が「今・ここ」の視点から語られるのが、発話時を基準にした〈時名詞〉である。すぐに気がつくことは、「ジュウ」としか読まない「今日中」「今晚中」「今年中」と「一日中」「一晩中」「一年中」の対応である。これは偶然の一致ではないだろう。(7)に示した〈時名詞〉のまとまり性の階層の高低が、それぞれ「ジュウ」としか読まない熟語と「ジュウ」「チュウ」の両方の読み方をもつ熟語に対応するのである。

(9) 【高】日、夜 > 年 > 月 … > 週 【低】

 | | |
 一日中 一晩中 一年中 (一か月中 一週間で)

 | | |
 ┌ 今日中 今晚中 今年中 ──── 今月中 今週中 ────
 「ジュウ」のみ 「チュウ」と「ジュウ」

発話時を基準にした名詞の中で、「今～」系の〈時名詞〉は、認知主体(話者)の「今・ここ」を含んで広がる時空間であるために、「範囲内全体」の意味をもつ「一～中」との対応関係を生んだのではないかと考える。

(9)に示した対応関係から、なぜ「今日中」「今晚/今夜中」「今年中」が「ジュウ」読むのかということだけでなく、「ジュウ」という読みを持ちながらなぜ副詞的に「範囲内全体にわたって」の意味で使えない(または使い難い)のかが説明できる。それは、

「範囲内全体」という意味で、既に「一日中」「一晩中」「一年中」という熟語があるためだと言える。この対応関係は、まとまり性が最も高く、基本的な時の区分である「一日」の場合に最も強力に働くと考えられる。したがって、(10)のように「範囲内全体」の意味では迂言的に表現する。また、実際には「今晚中に」と「今年中に」の場合は若干読み方にゆれがある（「チュウ」と読む人もいる）。(11)は「Podcastle」²³を利用して収集した文字・音声データである。このように「今日中」には不可だった「チュウ」という読みが「今年中に」では起こりうることは、まとまり性が相対的に低いということで説明できるだろう。

(10) a *今日中（ジュウ）雨が降るでしょう。（*は非文を表す）

b 今日は一**日**中雨が降るでしょう。

(11) 「今年中に」が「チュウ」と読まれている例（調査日：2008.11.1）

厚生労働省は、今年中に厚生労働大臣の諮問機関である中央社会保険医療協議会で本格的に検討を始め、…。

【ポッドキャスト日本経済新聞<総合版> 公開日：2007/01/09】

5.3 「ジュウ」の読み方の〈時名詞〉全体における分布

本稿では、現代においては「〈時名詞〉+中」の読み方の基本は「チュウ」であり、一定の条件を満たす一部の熟語が「ジュウ」と読むという考え方にたつ。重要なことは、決して二つの読みが線引きによって明確に区別されるのではなく、条件を満たす“典型的”な熟語からあまり満たさない“周辺的”な熟語まで、連続して存在するということである。つまり、連続性を動機付けるスケールが存在するということである。それが5.1と5.2で示した「まとまり性」の階層（図4：x軸）と認知主体を中心にした時空間の広がりから見た「今・ここ性」の階層（図4：y軸）である。y軸のスケールでは、「今～」系をA、「来～」系をB、「先～」系をC、発話時を基準にしない語をDとした²⁴。この二つのスケール上に〈時名詞〉を配置するにあたって、「言葉の硬さ（フォーマル性）」を考慮し、[1] 日常的な語＝和語系（平仮名表記）および漢語系の一部（片仮名表記）と [2] 硬い語＝漢語系の語（漢字表記）を区別して配置した。[2]は「～中」となる場合には基本通り「チュウ」と読まれる²⁵。図4の分布図の対象となるのは [1]の〈時名詞〉である。

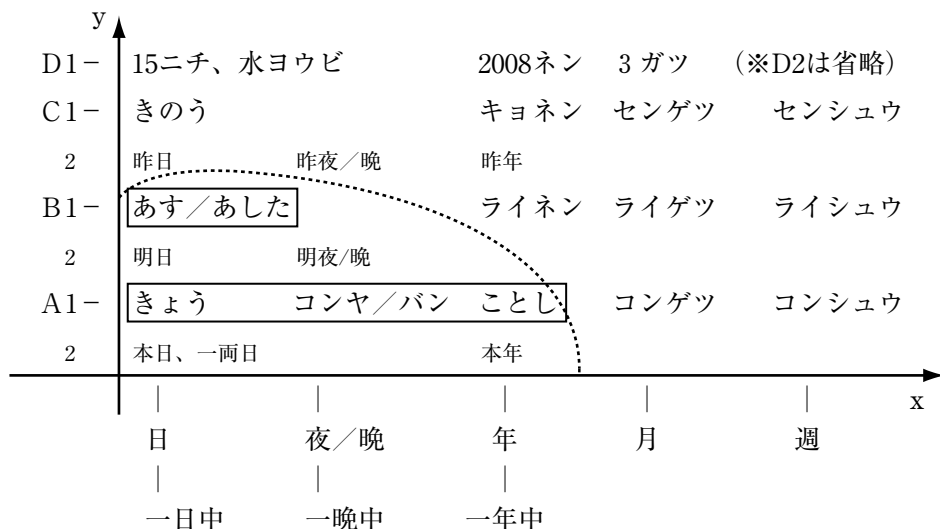


図4 〈時名詞〉の「ジュウ」の分布

x軸とy軸の原点に最も近い「きょう」が「ジュウ」と読む典型例で、点線の内側の名詞が典型に近い〈時名詞〉である。A1は既に取り上げたが、B1の「あす/あした」もこの内側に入るだろう。点線の外側については、典型から離れる名詞で、基本の「チュウ」を使うか「ジュウ」を使うかゆれが生じやすい熟語だと言える。以上をまとめると、(12) のようになる。

- (12) a 「〈時名詞〉 + 中 (に)」の読みの基本は「チュウ」である。
 b 「まとまり性」と「今・ここ性」が強い〈時名詞〉に付く「中」が「ジュウ」と読む典型的な名詞である。(図4の□内の語)
 c この典型的な名詞は「ジュウ」と読まれるが、「一～中」との対応関係によって、「範囲内全体」の意味では使われない。この制約は「今日中」において最も強く働く。
 d 典型的な名詞の領域から離れるほど「ジュウ」は使われにくくなるが、使われる場合には、cの制約も弱くなるため「範囲内全体」の意味で副詞的に「～中 (ジュウ)」が使われうる。

5.4 「午前中 (チュウ)」と「午後中 (ジュウ)」について

丹保 (2002) は実例を分析して、「午前」のほうがまとまり性が低く、表す範囲が「午後」と比べて曖昧だと指摘している (同書: 295-302)。これは「午前」に「中」が

つく理由にはなるが、本稿が設定した課題⑤を解決するものではない。第一に、「午前」は「午後」と違って、「午前中」という形式にならないと「範囲内」の意味を表しにくい語である点を確認しておく。これは抽象的な概念を表す「～期間」の振る舞いと平行している。

- (13) a {試験期間／有効期間／保証期間} は、1 か月です。
b {?? 試験期間 / 試験期間中} に、事故を起こした。
c {? 午前 / 午前中} に、友達と会った。
d 午後に、友達と会った。

実体のない〈時〉の把握は、区切りをつけてまとまりのあるモノに見立てるメタファーによる。「午前」「午後」は一日を深夜0時と正午で区切って生まれた時の概念である。この二つの区切りは認知的には際立ちが異なる。「午後」に「中（チュウ）」が付かなかつたは、午後の終わりは一日の終わりと一致しており、わざわざ明示する必要がなかったからだと思われる²⁶。そして重要なことは、まとまり性の最も高い「一日」と終点の区切りが一致していることによって、「一日中（ジュウ）」との重なりが意識され、「午後中（ジュウ）」の形式で「範囲内全体にわたって」の意味で使われると考える。二語の比較には (14) の3つのレベルを区別すべきである。「午前」が「午前中（チュウ）」になること（=14b）と「午後」が「一日」とのつながりから「午後中（ジュウ）」で使われること（=14c）は別のレベルのことである。従って「午前中（ジュウ）」がないのは、(14c) のレベルで考え、「中（ジュウ）」が付くなら「午前中中」となるはずだが、「チュウ」と「ジュウ」の連続が避けられ、「範囲内全体」も「午前中（チュウ）」が使われると考えるべきである²⁷。

- (14) a 午前（1時） - 午後（1時）：一日の半分の概念
b 午前中（は/に） - 午後（は/に）：「範囲内」に注目
c ?? 午前中中 - 午後中 : 「範囲内全体」に注目

6 まとめと今後の課題

本稿は認知的なアプローチで、「まとまり性」「今・ここ性」という〈トキ〉の捉え方が「～中」の「ジュウ」という読み方と深く結びついていることを示した。「～中」の読み方を調べるには、実際に「中」がどう読まれるか、どう話されるかを調べなければ

いけない。近年、電子コーパスを用いた言語の分析が盛んであるが、音声データのコーパスについては、その規模と利用の利便性の点でテキストデータのコーパスより開発が遅れている。本稿は実験的な試みとして、独立行政法人産業技術総合研究所がインターネット上に公開している「Podcastle」というサイトを利用してみた。収集した例文は紙幅の都合で一部しか引用できなかったが、音声データの量および文字化の正確さの点でまだまだ実用的ではない。〈トキ〉の捉え方と「中（ジュウ）」との関係については、実証的に裏づけるべく、さらなるデータの収集と分析が必要である。

注

- 1 「存在メタファー」とは、抽象的な概念を具体的なモノに見立てて捉えることで、本稿では客体としての〈トキ〉だけでなく、認知主体（話者）が時空間の中に身を置いて、〈トキ〉をどのように概念化するかにも焦点を当てる。第4節、5節で具体的に示す。
- 2 水野（1984）では、「体言系の語+中」に分類された「大気中」や「世界中」などが「チュウ」と「ジュウ」という音声形式が対立を有していると述べている。（pp.92-93）
- 3 「午後中」という熟語は、丹保（2002：293）が指摘するように、『日本語彙体系』岩波書店（1999）にもその語形が登録されている。本稿の著者が調べたところ、『日本語文型辞典』くろしお出版（1998）の「Nじゅう<時間>」の例文にも「午後中（じゅう）」が使われている。このことから、ある程度定着した熟語であると判断される。
- 4 丹保は「トキ名詞」という名称を用いている。
- 5 範囲がより明確なのが「午後」「夏、冬」であり、範囲がより不明瞭なのが「午前」「秋、春」であることを用例から導き出し、「～中（じゅう）」という読み方が選ばれる語は、範囲が明確であるという特徴を有していると述べている。
- 6 このような表記の変化の背景には、「世界中」などの場合は「中」の連濁とは見ずに、「いっぱい」の意味を添える接辞「中（ジュウ）」がついていると見なすという考え方があり、国語審議会の報告「正書法について」（昭和31年）でその方針が述べられている。（文化庁編『言葉に関する問答集 総集編』を参考）
- 7 新濁は連濁の一種であるが、母音に後接する音節が濁る場合（いわゆる字訓語の複合によっておこる連濁：「かわ→おがわ」）ではなく、漢字音の鼻音が契機となっておこる連濁のことである。「古く漢字音に於て、本来濁音である音を本濁と云い、本来清音である音が、他音との連結上、濁音となったものを新濁と言った。」（橋本1950：282より）
- 8 丹保（2002）でも新濁を経て意味の分化があったのではないかと述べているが（同書：307、注1）、本稿は意味の拡張に関して若干異なる見方をとる。
- 9 小林（1970）は、鎌倉時代前後からは、母音 [i] [u] の場合にも起きており、鎌倉後期には

入声音の場合にも起きていたと考えられると述べている。

- 10 全部で7例あった。[n]の場合：山中、人中、現身中；[り]の場合：衆中、大衆中、虚空中；[m]の場合：心中。
- 11 「年中（チュウ/ジュウ）行事」の例が残っていること、入声音にまで起こる環境が広がったことを考えれば、「(～)月中」「(～)日（ニチ/ジツ）中」にも起こっていたことは十分に推察できる。（注9も参照）また、『角川古語大辞典』の「ぢゅう」の項には、範囲内を意味する語例として「ことし中」（「今年一年で」の意味）が採録されている。
- 12 「年中（チュウ/ジュウ）行事」「連中（チュウ/ジュウ）」など
- 13 これは丹保（2002）でも指摘されている。またこの意味の分化に、「充、始終、重、重々」などの読みと意味の関係が影響した可能性はあるが、実証されていない。（p.308注1）
- 14 もっとも、図1に示したように、新濁によって生まれた「～中（ヂュウ）」の読みは、現代に至るまでに消滅したものも少なくない。次節で論じる「条件」に適さない語についても「範囲内全体」の意味をもち「ヂュウ」と読まれていた（時名詞）が存在していた可能性は否定できない。しかし、現代に至るまでに、その「条件」に合わないものは、連濁しない「チュウ」に戻っていったのではないかと考える。また、水野（1984）でも、「場所」と「時」とのつながりを示唆する記述がある。「[純粹にトコロを表す語+中]の用法が、「モノを表す語+中」の用法と重なり合うところに、{チュウ}・{ジュウ}の対立が見られ、その対立が「トキを表す語+中」に及びつつある、という解釈が成り立つのではないかと思っている」（p.98）
- 15 「Google日本」を利用（<http://www.google.co.jp/>）
- 16 「週」は「週間」で検索。「月」は「月、か月、ヵ月、ヶ月」の合計。「丸～」の「1」は漢数字の「一」でも検索し、その合計を出した。検索にあたっては、目的の表現が拾われるよう、次の検索式を用いた。（“丸1年” | “まる1年”）
- 17 「青空文庫」は著作権が切れた小説などを中心にそのスクリプトをウェブサイト上に公開しているサイトである。本稿はこれを簡易的な電子コーパスとして利用した。（<http://www.aozora.gr.jp/>）
- 18 広瀬（1993：36-37、96-101）、国立国会図書館が運営するホームページ「日本の暦」の情報も参考。
- 19 太陽暦採用以降、主に使用されていたのは「引き札暦」といって宣伝を兼ねて印刷したものか「略暦」という一枚刷りの暦で、それは現在一般的な一か月が一週間ごとに区切られているものではなかった。当時の暦については国立国会図書館の運営している「近代デジタルライブラリー」または「日本の暦」のサイトでも実物の写真が閲覧できる。本稿の筆者が調べたところ、現在の一般的な一か月が週ごとに区切られている体裁の「引き札暦」としては大

正14年のものがあつた。また、現在とほぼ同じ体裁のカレンダー（月ごとのめくりカレンダー）が大正13年から大阪朝日新聞社によって「朝日カレンダー」という名称で附録として配布されていたという（情報提供：朝日新聞大阪本社広報部）。しかし、本格的に普及するのは昭和20年以降だったようである。（広瀬（1993：184-185）、「新藤曆展示館」「全国団扇扇子カレンダー協議会」のホームページの情報も参考）

- 20 青空文庫については、注17を参照。
- 21 「一」は算用数字の「1」でも検索し、合計した。「月」は「か月、ヵ月、ヶ月」の合計。検索にあたっては、目的の副詞的な用法の表現ができるだけ拾われるよう、次の検索式を用いた。これは「に」「は」「の」「で」が付かない「一日中」という文字列を検索することを意味する。“一日中” - “一日中に” - “一日中は” - “一日中の” - “一日中で”
- 22 「一月中」という文字列での検索は、注21に示した検索式でも、非常に多くのノイズを拾うため合計には入れていない。したがって、実際数は1,419よりは高い。しかし最大に見積もっても数万件なので、それを含めても、「日」と「年」との差は桁が異なる。
- 23 Podcastle (<http://podcastle.jp/>) は独立行政法人産業技術総合研究所（AIST）が提供しているサービスで、インターネット上に公開されているポッドキャスト（主にラジオ番組の一部やニュースなどを音声ファイルにして公開したもの）の音声データを文字変換し、検索できるようになっている。このサービスを利用すると、文字列で「今年中」を検索した後に、その文字列の実際の音声を確認することができる。ただし、自動文字変換の処理能力は完全ではないのでノイズも少なくない。
- 24 未来を表す「来～」系を、過去を表す「先～」系よりも典型に近い位置に置いたのは、時間の空間化メタファーにおいては、時間が認知主体に向かって流れてきて、認知主体はそれと対峙するという構造が想定されるからである（谷口2003：24）。従って、認知主体の視点は過去より未来に向かっていてと考え、「来～」系を「今～」系により近い存在だと判断したが、これについてはさらに検討する必要があるだろう。
- 25 A 2の「一両日中」を「ジュウ」と読む場合がある（ウィンター1973：16）のは、2であっても、原点に近いところに位置しているからだと説明できるだろう。
- 26 森田（1989：707）では、「『午後中に』と言えないのは、午後の終わりは「きょう」の終わりに重なるから「きょう中」で代表されるわけである」と述べている。「午後中（ジュウ）に」が使われない理由はそのとおりだと考えられるが、これでは「午後中（ずっと）」のような使い方が実際にされていることを説明できない。本稿では、「一日じゅう」に対応するかたちで、「午後じゅう」があると考ええる。
- 27 「午前中じゅう」は非規範的な熟語だが、googleで検索すると、34例がヒットする。「午前中」にさらに「うちに」が接続できること（「午前中のうちに～」）を考えると、「午前中」

にさらに「範囲内全体」という意味を出すために「じゅう」を付けたくなるのかもしれない。(使用例：洗濯や布団干しは午前中じゅうに済ませた方がよさそうです。「杜の都「仙台」情報、発信！」<http://watch-sendai.seesaa.net/archives/20080526-1.html>：検索日2008.11.04)「夜中じゅう」があるのは、「中」が「なか」と読み、かつ「夜中」が一語としての結束性が高いためだろう。その点、「午前中」は「中」が「チュウ」と読み、一体性は高いものの「午前+中」と分析的に解釈されるために、「チュウ」と「じゅう」の連続が避けられ、「午前中ずっと」のように表現するのではないかと考えられる。

参考・引用文献

- ウィンター (山崎) 良子「中と中との使い分けについて」『日本文学』(立教大学) 30 (1973) : 14-19
- グループ・ジャマシイ編著『日本語文型辞典』東京：くろしお出版、1998
- 小林芳規「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」『広島大学文学部紀要』(広島大学) 29 (1) (1970) 1-35
- 谷口一美『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』東京：研究社、2003
- 丹保健一「接辞的造語成分「中(チュウ)」「中(ジュウ)」の使い分けについての覚書き―「午前ちゅう」「午後じゅう」「夏じゅう」「冬じゅう」を中心に―」『国語論究 第10集 現代日本語の文法研究』東京：明治書院、2002：288-317
- 丹保健一「現代日本語における漢語系接尾辞「～中(チュウ)」「～中(じゅう)」の使い分けをめぐって」『国語語彙史の研究20』大阪：和泉書院、2001：左45-57 (330-318)
- 筑波大学日本語教育研究会編著『日本語表現文型 中級I』東京：凡人社、1983
- 橋本進吉『国語音韻の研究』東京：岩波新書、1950
- 広瀬秀雄『日本史小百科5 暦』東京：東京堂出版、1993
- 文化庁編『言葉に関する問答集 総集編』東京：大蔵省印刷局、1995
- 水野善道「漢語の接尾的要素「～中」について」『日本語学』3 (8) 東京：明治書院、1984：87-101
- 森田良行『基礎日本語辞典』東京：角川書店、1989

参考ウェブサイト

- 国立国会図書館「日本の暦」：<http://www.ndl.go.jp/koyomi/index2.html>
- 国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」：<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>
- 全国団扇扇子カレンダー協議会：<http://www.zenkyo.net/index.html>
- 新藤暦展示館：<http://www.shindo.co.jp/koyomi/index.html>

用例収集のために利用したウェブサイト

『青空文庫』：<http://www.aozora.gr.jp/>

『Podcastle』独立行政法人 産業技術総合研究所（AIST）：<http://podcastle.jp/>

参考辞書

『角川古語大辞典（第4巻 た-は）』東京：角川書店、1994

『広辞苑』第五版 東京：岩波書店、1998

『大辞林』第三版 東京：三省堂、2006

『日本国語大辞典』第二版 東京：小学館、2000